大正九年四月廿五日發行
長野縣松本市小柳町八十五番地
印刷所 淺川活版所
長野縣松本市
發行所 童澤書店

岐蘇林友

大正九年四月二十五日　第百廿六號　毎月廿五日發行　定期　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

岐蘇林友第百廿六號目次

□調査
◆樹木の描き方（一）
◆苗木植栽に就て
□隨筆
◆時事偶感
◆薄暗き斷片
◆心の一片
◆無題錄
□文苑
□雜報
◆學校便り
◆校友會便り
◆會員異動
◆七宮先生謝恩金領收報告
◆林友代領收報告

樹木の描き方　其一（抄譯）

羅斯錦

○樹木を其の主幹も枝條も共に分岐する場合以外には先端程次第に細くなることは決してない

主幹より大枝が、大枝より細枝が、細枝より芽が、夫々分岐して生ずる場合にも其の幹又は枝は常に其の分生した枝の太さ丈自身の太さを感じ然る後は依然として全一の太さを保つて行く、何等かの變化が若し有りとすれば更に分枝する迄は寧ろ太さを增加するとも減少することはない

○此の法則は嚴乎として例外を許容しない如何なる主幹如何なる大枝如何なる細枝も分岐し又は出芽して其の實質の一部を分割するに非んば寸毫も其の太さを減ずるものではない、其れ故若し樹木の頂又は其の周圍に現に存在し又は曾て存在した細小なる枝條を悉く纏めることが出來るならば其の全体は之を派生したる幹材と同一の大さとなるに相違ない

○然るに大抵の樹幹は柔かな下葉を着けた小枝細枝を派生し其の各個々の纖維は丁度其の太さ丈の要素を母体から取去り了して其の大多數は枯れ落ちて後へは唯其名殘を止むる瘤位を殘すに過ぎない故往々幹その物が先の方で稍細くなる樣な外觀を呈するのである、此の狀態は枝の場合に特に明白であるそれは總て樹木の若枝は自身の維持し得る分量以上に澤山の小枝を分生する故である、之等の小枝は其の元枝が太くなるに從つて分岐点の處で萎縮して樹液の流入が阻害せられ遂に枯死凋落して只其痕に小さな瘤を殘すのである、それで其枝が先へ行くに從つて段々細くなる譯であるが其の實細まり方が極めて些少であるから若し枝のうちで實際に二叉になつて居るもの又は現に小枝を澤山出して其の太さを感じて居るもの等の以外の枝は先へ行つて段々細くなる事は殆ど吾人の眼で見分けることは出來ない、又過去に於て小枝を分生しなかつた枝では全然之を認めることが不可能である然し樹木に於ける此の一般法則を隱す爲に自然は非常な注意と苦心とを拂つて居る樹枝は絕えず小枝を出してそつと人目につかぬ所で其の容積を少くして居るから少し上部に行つて見れば太さの減じたことに氣が付く、更に樹木の上部に到れば分枝が甚だ頻繁で且纖細に行はれて居る故一見した所では丁度枝が現に先で細くなつた樣に感ずるのである

○然し折々貪慾なエダがあつて自分獨り養分を貪取し數尺の間少しも分枝せないで居ることがあるが斯樣なエダは醜い感じを與へるものである

○以上の樣であるから樹枝を描く時には現に先程細い樣に描いてよい又描かなければならない、然しそれは其の樹枝が更に枝葉を出して居る場合又は遠方にあつて個々の

分枝が眼に映じない場合に限る、如此場合に於ても枝の細くなり方が決して急激ではなく寧ろ緩漫である、すらりと細く見える枝でさへ枝の直徑の長さの十倍に對して直徑の十分の一以上を失ふことは殆どない、若し之以上に細くなる爲には必ず分枝が行はれて居らなければならぬそして分枝の度毎に一段一段と細くなるのである

苗木植栽に就て

西澤生

苗木植栽は何でもない樣なれども、植方を知ると知らぬとは、大なる相違を來すものなれば、頗る大切のこと、思ひ本題を揚げたのである。即ち林地如何に肥へ、地勢如何に樹木の生長に適すと雖ども、植栽の方法にして○當を得ざるときは、強健なる苗木も自然生活を營むこと能はずして、造林の目的を遂ぐる能はざるに至る、又單に苗木の生存完全なるも、植栽に關する勞力と經費を節約し、造林費の投資を可及的少額ならしめざれば、亦以て造林事業として成功せるものにあらず。故に造林上植栽の注意は忽緒にすべからざる重要事項なるを以て、左に其要領を述べんに

一、撰苗法

苗本植栽には養良なる苗木を撰ぶこと肝要なるにも拘らず、各地の狀況を視るに、往々苗木の撰擇は大小にのみ重きを置き、且つ杜選なる弊習あるを認む、蓋し造林の要義は勉めて强健なる苗木を植栽するにあり、然るに苗木計算の都合、否苗圃事業成績に顧慮酌量して、偶々棄却すべき衰弱損傷の苗木を混入することある。是れ造林の成功に有害なるものにして、不良の苗木は植栽後の生長回復することなく、遂に補植の損失を免れないのである。故に初めより造林の要義に鑑み、適當なる撰苗を爲し、强健なる苗木のみを植栽すること最も肝要なることである。

二、苗木の堀取運搬法

山植の枯損原因中、堀取運搬の粗雜濫扱に依ること頗る多し、是れ植物の各部中根部は感覺最も鋭くして、一旦傷害を被れば直に他の機關に影響を及ぼすべきを以て、根部の保護に深く注意を要すべきのである。然るに苗木を堀取りたる儘、其根部を氣中に暴らし、或は陽光の直照に對し放置することあらば、數分時間にして十中の八九は枯死を免れぬので、又之を運搬する時も、日中晴天にして日射風暴の防備不充分なるときは、同樣の結果を見るに至る、故に纖根の乾燥を防ぎ、若は日射風暴を禦ぐことは、苗木取扱上の重要なることである。故に苗木の堀取後は直に濕潤なる蘚苔、或は陽光の直射を防ぎ、又快晴の日には晝間に苗木の運搬を見合せ、可成朝夕又は夜間に於てするを可とす、又其運搬數日に亘るときは出來得べくんば、途中荷造りを解き空氣の流通を圖り、且つ蘚苔を濕潤して發熱を避くべし、又荷造は餘り堅なるときは、一層危險なるが故に、荷造の際苗木の中心に麓束又は枝葉を入れて外氣の流通を計るを可とす。又荷造りには粗目なる大籠を用ひ、苗木根部を內にして環狀に稻重ね層間に少しく水濕せる蘚苔を薄く敷くを可とす、又堀取の際苗木の根部に附着せる土は、荷造りの際之を拂ふを禁じ、且つて蘚苔には少しく土を振掛くべし若し夫れ年々遠隔せる造林地に苗木を送る時は特に箱形の容器を作り空氣の流通を良くして箱底に切芝を敷き、側面は蘚苔芝草を以て蔽ひ其中に苗木を立て、積重ね、充分水を灌きたる後輕く切芝を覆ひ更こ其上部を破覆するときは最も安全なりと思はる凡そ裸根の苗木を注意し取扱を爲するに要する費用は其苗木を使用せる造林地の成績良好なるに依りて之れを償ひに餘りあることである

三、植栽の法

苗木はその深根性と淺根性とを問はず總て充分に深く耕軟せられたる土地を好むが故に荒蕪せる伐採跡地等にして雜草の繁茂せる土地には深く堀返へしたる植穴に植栽するときは苗木の生長旺盛なるは勿論爲に補植費を減ずることを得る而かして植栽の際は一木毎に一團に在りたる狀況と同一の深さ位置に植付け丁寧に根を土中に入れ能く其根を搦げて土を掛け穴の全く埋りたる後、木の根元を輕く踏固めて最も安全に生活を營み得る樣務むるにあり又植付には成るべく熟練なる人夫を傭入れ一木を出來丈け大事に取扱ひて植ゆるを可とす而かして

誰と手入を怠ることなく常に其季節に應じ施行することを要す、然らざれば折角骨折りて植栽を爲するも、造林の目的は適はざるものになるに依り當業者は須らく如上の事項に留意すること大切ならんと思ふ（完）

時事偶感

島の里人

時勢滔々推移して止る所を知らず思想亦千變萬化、今是昨非を嘆ずるも枚擧に遑あらず、で近頃は改造の聲高くして其結果はたして如何未だ其の臆測さへ許されないのであるかくて此世態を見るに當り甚だ漠然たるものながら余は徹底的に各自の自覺を注文したいのださて自覺とは何ぞと言ふに第一に自分を知るを以て要義とする此の自覺の活動に依りて世は自身に有意義のものとなる此の自分を知る方法は種々の觀察を要すれど先づ內部と外部から致さぬばならぬ即ち內容の自覺と位置の自覺である內容には自分は世の中に何う云ふ自質を有し如何なる價値を持つて居るかと云ふことである外部は此の社會に如何なる位置を有し他人と如何なる關係を持しつゝあるかを思考するのだ內部のみにては如何に極度迄達したとて完全なる自覺とは云ひ得ない近世に至りて吾人は各自或人格を持し國家社會の何れの方面に如何なる價値を有し此の社會に共同生活をして自家發展を計り社會國家の進運を盡しつゝあると云ふことを了知しながら活動すると云新しい思想が興つて來たかくて各個其人格を有し資產なり家族なりを安全に維持が出來るのは吾人が一本立即獨立して居るのではない世界人類が共同して居る爲であると云ふことを自覺して來た結果なのだ茲に初めて徹底的自覺を來したのであるこれ個人が社會を形成して居ると社會的自覺をしたのだ抑人類の發達は初期に於ては全々幼稚なものであつて部落を形成して恰も蟻も蜂の樣に自然習慣で無自覺に團結したに近いものがあるよし間々自覺したりとて精神上勢力上腕力上他に壓服せられ斯く爲さゞるべからずと義務を以て强い强い力の爲に屈して働いたに過ぎない樣に思はれる其の中に星霜移り時代は變化して人智も徐々開發の機運に向つて教育も進み漸く個人の自覺的傾向を帶び押付けられて上の權力に服從して居た者が眼が醒めて此の壓力を敢て除ても長い習慣は終に脫するに由もなく其れ自らが壓力の所有者となつて他を押付ける又他が眼醒めて來ると云ふ樣に循環して居る中に其の樣式は全く以前のものならず自分達は一人前の人間である各自が一番豪いものと知り各自其の價値を有する者と感ずる樣になつて來たのが自覺の最初で遂には獨尊を極め込む各自獨立を絕叫する意志の尊重となり匹夫匹婦も其の心を奪ふべからず我が自由は傾く勿れと云ふ內容の自覺を誘致したのである、一方より云ふと權利の主張であるかくては各個の自覺は、人間としての發展で立派なものであると感ずるに伴ふて內部のみでは甚だ貧弱なものだと感ぜずに居られなくなつた、それで其の立派な人格を具備した人と人とが共立關係を以て此の社會に處して行くことが眞に價値を有するものと信ずる樣になり、以て萬物の靈長たる所以を發揮して蟻や蜂の無自覺なる共同生活でなく、自覺したる共同生活で生存の意義を生ずるに至つたのだそれで行爲の制限も要るのだ、そこで斯くすべしとかするが當然であると義務本位になつて來た、此の義務は前世紀の逆戻ではない、理智の上に建設せられた自覺である

我國では自由權利のみを主唱して居る勞働問題にせよ普選問題にせよ昇格運動にせよ皆之れに外ならぬのである此自由權利の思想は既に西洋諸國の舊思想なるには驚かざるを得ないさては最新思想とは各人が本統に自覺し眞に價値ある共同生活を營み各自最上の發展を計るにあるのだと思ふて居ることは決して盲從的でなく全々自覺的である義務と云ふと直ちに或人が或人を唯苦しめ壓制を加へんとする爲に負はすものである如く感ずる人もあるかも知れぬが個人が社會の共同生活を營むに就いて各自權利を有するにあらで社會全體の人に權利は所有せられて居るのである義務を負はすのは共同生活を營むに必要だけの犧牲を要求するに依つて生活が圓滿完全に進むのであると思はねばならん各自權利を主張して十分に獲

得せんと計らば必ずや他人の權利に抵觸を來す恐れなきにしもあらざればなりである。これ義務犧牲でなくて各自が圓滿完全なる共同生活を營むに必要なる保護を與へられて居るのだかくて吾人は常に忘れ勝であるが吾人生れて呱々の聲を發してから一個の成人となり自營自活して世に立つ今日になるまで他より受くる所の恩惠は一でない先づ父母の保育の恩の次に師長尊者衆生の恩更に至尊及國家の恩である故に吾人は常に他の力の下に助けられて居る人の助を受けて居ると云ふと一大屈恥でもある樣に感せられるかも知れんが其の考へ誤謬と云はなければならない其の鴻恩に報い且世の神益をなし青史に氏名を垂れ死して猶は措しまるる人とならなければならんのは言ふ迄もないことであるが助けられて居ると人間の恥辱でも何でもない社會の如何なる人とても皆他の助けを受けざれば生活し得ないに依つて、ある世界獨立自營と呼號するが更に他の助を借らない絶對獨立自營即ち孤立と思ふ人もないとも限られん孤立は今日の世の中では不可能の事で仙人ならいざ知らず人間と沒交渉な隱遁者と云はれて居る者でさへ其の衣食には木の實草の芽を採り住居には岩蔭に依らねばならぬのだそれで人間は相互に足らざる所を補ひ助けて生活をなし人間の人間たる所以人と人との結合に依る共同生活を圓滿に實行して天賦の能力を善養し利用して我等が至尊國家社會衆生より負ふ所の鴻恩に酬ゆると同時に更に餘裕の綽々たるものを子孫後世に存して永久に其の餘澤に浴せしむる樣にするが萬物の靈長たる所以であるそれで吾人人間は共同生活を圓滿にするは必然の道理であるこれに適應する人は今日に於て優秀な人と云ひ得べきである此の社會共同生活の規模を大きにした最も圓滿なものは國家である よく國家個人社會と言ふが個人の生活を爲し得るのは國家のお蔭で個人を集團して社會が出來國家が成立するのであるから國家は社會個人を包含するものなのだされば國家は人間共同生活の尤も力強い尤も意義あるものとなる

然し歐洲大戰亂の結果として國際聯盟なるものが成立した國家は世界に澤山ある其の澤山の國家は個人が孤立することの不可能である如くやはり孤立は出來ないのは論を俟たない所である茲に國際聯盟の名目の下に大小澤山の國家が分子となつて一種の共同生活を營む樣になつたことで國家の君主なり執政官なりが代表者を派し或は自ら出馬して此の國際會議に依り政治經濟法制交通犯罪勞働などを協議するのだ其處に將來は國際的共同生活でなければならぬ樣になりやがては密接なる關係の湧出するオーシスを形成するのであるまいかと思はれるそれに此頃は日支親善とか日米親善とか言ふ事が唱導せられるのであるがこれ識者の宜傳に係る所で成程と頷かれることである然し米國や支那などとの外交が圓滿を缺いて居る證據で國際的共同生活の不圓滿なる立證となる支那人は未だ開發せられない人民であるから不法行爲等も敢てする事があるのを我國民は寧憐んで教導の任にあるをチャンコロ式に愚弄する果ては壓迫的行爲が多く忠恕の念が缺けた爲に彼の信頼を置く能はざるに至るのではあるまいかそれで益々支那人との間に逕庭を築く樣に思はれる勿論現今の支那の人情風俗には未開國だけに感心し兼ねるけれど彼にのみ惡い所があつて我れにないとは必ずしも云ひ得られない米國やはり同樣である尤も米國人はレコード破の國民であるから突飛は彼の常法とする然し我國は万世一系なる皇室と外國の侮辱を被らざる金甌無缺の國體で此の近年に蕃人を壓服して新に組織した國家なぞとは同日の論でないなどと意張散らされ其上數多の移住民が入り込んで年々長野縣治五六倍の收入を皆本國なる日本へ送金して米國の繁榮には細少もならんのでは米國人の身になつて見ても知られる恰も嫁が里方の家柄を鼻に掛けて誇り散らし月々里方の仕送をする樣なもので姑の喜ぶ者のないのは當然の事と云はねばならぬ且日本に來て見ると毛唐人扱をせらるゝに至つてゞあるまだ我日本帝國には社會共同生活に順應する樣に教育する學校もない無理のないと思ふ要するに此國際的共同生活をするのであると各人が自覺して立派な人格を以て

世に處して行つたならば國内の諸問題は云ふに足らず日米親善も日支親善も朝鮮問題など易々たる解決を告くるにはあはざるかされば此の國際的方針を以て我國民一般に徹底せしむる必要がある先づ隅より初めよで讀者は其の決心にて一般に傳播を計られたい此の精神にて公明正大なる我國固有の人道主義に基いて仁義を行ふて世界各國の龜鑑となり、我帝國が國際聯盟の中心となつて世界人類の福祉を增進する樣になれば日本帝國の名譽幸福なるのみでない世界人類の幸福であるされば此徹底的自覺によつて共同生活に適應する樣に修養を積んで行かねばならん權に思ふのであります（終）

薄暗き斷片

草山　芥平

すべてが蘇る。張ち切れそうな若やぎと力を包んですべては蘇る、冬の間散々に虐げられた草木が今や各々その幹に枝に新しき水を湛へて向上の第一歩を踏み出した。灼熱の太陽の下、幾十里の山谷に擯がつたぎら〳〵した青葉の輝きに想倒する己たちの胸にも覺醒と躍進の赤い血潮が渦卷く。己たちの歩いた過去の一切の頽屠と否定と消極とを捨て、自由と肯定と能動との新しい生きように入らねばならぬを思ふ。

よし己たちの歩むべき路は寂しくとも。

□

俺たちの若い事を何人がよく否定し得るか。無い。然り俺たちは何物に向つてもこの若さを眞向に振翳して進むことが出來るあらゆる能動と積極と勇敢は若き者に與へられた特權である。因循と姑息を排し確實を態度の表明を常に欲求して止まない。考へる前に先づ行ふ——よし其れが失敗する共何で恥とならうぞ

俺たちは未完成でいい。其處に遠い前途と完成の餘地とを有してゐるんだ。納り込んではならぬ。安住は生長の終局だ。安易の生むものは倦怠と墮落のみだ。すべての偉大さが安易や滿足などの中から生れるものか、困ばいと苦惱の中から出現した偉大なるもの、例を俺たちは俺たちの過去に於て多く見せつけられて來た。實に眞劍に苦しむ事が尊い体驗であらねばならぬ

□

俺たちの不平も不滿もをう惱も焦慮もみな俺たちが眞直ぐに歩けぬ時に勃發する。己達は自分の道を眞直ぐに歩きたいのだ。如何なる障碍にも正面から打突からなければならない。破壞——而も破壞其物ではないが故に。

□

ある男が「山林學校は器械を製造する所だから……」と言つて子弟に教へたときいはた時己はむら〳〵と腹を立てた。後に自分は靜かに考へて見た。そして其時既に自分の良心がその男の言つた侮辱的な語を肯定してゐるのに氣附いた。その語に對し何等の抗辯をさへなし得ない悲しい己れを見た。何といふ矛盾——。己の良心は完全なる器械となる前に一個の人間として生きる事を要望してゐた。人間の本性を閑却した教育を強ひられる事は堪へられない。己がその男の語を憎んだのは器械扱ひにされることを拒否する心であつたが爲だ。己たちが肉体の一部を引裂いて見てそこに赤い血潮が流れてゐる間己たちが全く器械化する事の不可能を語らねばならぬ己たちは人間である

□

裏面には常に建設の尊い閃きを見るそれ——が行手を遮るものに與へる最後の斷案である。若き者は眞實である、が故に一味の逃避や彌縫で誤間化してはゐられないのだ眞實な目醒——人間としての覺醒、己達は又常に深く己れを体得してゆかねばならない。自己を極はめる事は自己を眞に知る事に外ならない。自己を見極める事は自己存立の價値を確實に認識する事である、非常なる壓迫と慘虐に遭遇し、たとへ流血の苦痛を覺える共權勢に屈服するものは卑怯だ騒音と喧噪の中にありながら常に強いこれを見失つてはならぬ。

若者の世界は絶對である。老人の干與すからざる所である。天眞な奔放な自由なの世界に誠に入り得る老人あらばこれ眞奇蹟であらねばならない。強ひて立入ら

とする所に撞着と矛盾を生じ、眞實を渇仰する若者の血を湧立たしむるのである。實に眞理は若きものの常に畏怖する所である

下級生に對して忠告する時「僕等は若自身の爲を思ふが故に―。」と言つた事はないか、そしてそれが眞なる愛の言葉であつたか、又は私の憎しみの言葉であつたかといふ事を考へた事はないか

確な愛の本質は敬虔である、眞摯である。そして偉大である、何等の僞瞞も見せびらかしもないものだと考へた時赤面した事はなかつたか。自己以外のものを批判し得るものが此の世にあると思ふか。人を裁く權能をあなたに誰人が與へたか。本當に裁き得るものは遂に各々の自己がなかつたか。先生が生徒を、上級生が下級生を裁く時共にもう一度何か考へて見るがいゝ。

□

空へ―あの無邊の大空へ――。自由に闊達に俺等が心を飛ばしめよ。（四、一九）

心の一片

通り一遍のお世辭と月並な交際をする友人は澤山あるが同じ煩悶の中に生き同じ境遇に支配されて、ヘボ〳〵日暮を急ぐ曠野の旅人のやうな眞の愁を共にする友人は一人もない、自分は極端な男だ世辭を云ふことの嫌な男を隱すことの出來ない性分の自分は恐らく永久に孤獨であらう

獨生獨死獨去獨來　と釋迦の言葉吾れを欺かないと思ひつゝ、自分は今たゞ一人校舍の一室に眞に障害ない所だ

自分は近來つく〳〵約滅の悲哀を味ふのである氣候は春となつて微笑樣な春となつたのだがどうしても本當の眞春の氣を味ふことの出來ない實に私の心は悲哀を感じて來たさうして寂―寛―歴世―茫々たる曠野に日の光なき陸を眺める樣な自分の未來だ

現實世界に牴觸した自分は狂瀾怒濤の實現界に揖帆を失なつた漂流者となつた自分は決して孤獨から生れはしないだらうか自由存生　それは孤獨の思寵であらねばならぬ

母に死に別れ父は老ひ自分獨り落寛たる人生の曠野に起ちつゞけやう　さうして終生孤獨を賛見しよう

さびしさや
はかなき夢のなげかひに
水面の月を一人眺めむ
夜もすがら

校舍の中に物言はぬ
吾がかたくなを
一人悲しむ

九、三、一二、　K子

無題錄

烏兎匆々歳月流る、如く光陰矢の如く白駒の隙を過るが如しとでも云へば少しは其の速さが想像出來るだらうと思ふ程二年有餘の月日は早くも彼へ飛び去つた俺が入學した頃上の連中の鼻息を望遠鏡で見てゐたなぜが昨日と思つてゐる間に今日は最早二年生おまけに卒業間際とはいよいよくすたつたいだがこんな事を云つても此春は出て行かなければならい「そんなら遠慮はいらん、もう一年も遊んで行け」なんて云はぬても尚困る話だとにかく遲かれ早かれ社會と云ふ妙な舞臺へ出なければならぬ唯それに對する準備が違ふだけである出來る事から最短期間に準備して乘り出すが得策の樣だがそうかと云つて小さな學校を出て鬼の首を取つた樣に威張つても駄目の皮だ世の中へ出ても通用が餘り利かないだからこんな事がある或時つまらぬ學校を出た頭の手の三本足りない男が得意になつてどこかへ行つて使つて呉れと云つた所が「何使つて呉れ？ただなら使つてあげよう」と云つた相だ嘘だと思つたら西暦嘘八百年十五月六十八日の新聞萬嘘報にちやんと書いてあるからよく見給へこれは全く嘘八百だが餘り通用しないのは實際かもしれぬそこへ行くと矢張り此箱をつけなければ駄目だ金箱にも何官學出だの何學士だのと色々あるが之を身體にはりつけると御光がさして通用が利く相だでも餘り金箱製造に夢中になつても困る頭に白髪がぼつ〳〵出始めた時分やつてさあこれからだなどと云ふと「若しゝ々お爺さんあなたはこれから社會へ出立つんですかそれより三途の川へ旅立つ方が早う御座いますぜ」なんて云はれるかも知れぬ先づゝ々物は程度だから學校を出たと云つて之に安んじても駄目亦白髪の金箱製造人も駄目だが之はめつたに居ないから大丈夫然し弱つたのはこの小成に安んずる男であるどうした陽氣の加減か知らぬがこのけつたいな奴が俺はもう學校を卒業した樣な顏してサノサ氣分でうろつき廻る者がよくこのけつたいな奴に得て有勝なものである

そして卒業すれば何處でも俺を歡迎するそしたらあゝしてこうしてなんて愚にもつかん事を夢みて居るから益々おかしいわけだあて事と何どやらは先からはづれるとも知らずに漸く突きあたつて駄目になつてから目をさます奴がこの享樂主義の親分に三味線を加へて二で割つた樣なけつたいな男である、こんな奴がもし大きな顏して人中を白晝に歩くならばうれはほんとに天下の奇蹟でなければならぬ如何とならば此奴に限つて夜晴い所をこそこそ歩くのが好きだと云ふ事だから或はそれによるのじやないかと俺は思ふ詰らぬけちけちした事を怒るよりこんな男の根性膽を叩きなほしてやる方が餘程國の爲になる事だ然しこの妙な男にもそれ相應の自分の都合のいゝ意味に於ての考へがあるだらうと俺は思はんでもないから俺はこんな奴が居るか居らぬか知らぬが其れは善いとも惡いとも云はぬ、亦俺の云ふべき事じやない他に云べき人がある筈だと思ふ尤も善くも惡くも云はんからと云つて唯放任するのでもないいよ〳〵或所迄行つたら何うかする位の覺悟が必要である俺はそんな男がもしも居たならば唯其奴の反省を待つのみだ自覺を望むきり何も云はぬ唯何事も程度だから俺達は其處に一つの或物を見出して進まなければならないとにもかくにも俺達は小成に安んじず交誇大妄想狂みたいな事も考へずに眞似目な氣持で正確に其の社會へ乘り出す第一歩を踏み出すべきである終りに俺は其の全人格が神樣の樣に完全ではないが唯半業が近づいたから之を少しく書いたのである

文苑

眞木の屋主人

○雪霽れぬ麓の道を横切りて山鵲とぶ魂ぎる聲の

○せゝらぎの聞ゆるほとり梅の花一ツ二ツの里はよろしも

○旅なれば心わやしき曉をきゞし聞くなり山中にして

○わが心空虛に似たり駒ク嶽峯より上る雲を見つめて

○蕭々と野面は暮れて安らけき眠に入るを我と我身は

○春雨は生を朶みて降り出でぬ止みては晴れて又降り出でぬ

○しげ〳〵と眺めくらして長椅子に依りし心の花のさくらを

學校便り

○卒業式　三月廿六日午前十時より第十七回卒業證書授與式を擧ぐ、國歌合唱、勅語捧讀、學事報告、證書授與、校長訓辭、知事告辭、來賓祝辭、在校生送辭、卒業生答辭にて正午式を終る、縣廳より山崎縣視學知事代理として臨場來賓には內藤林野支局長、齋藤出張所長、園部郡長、伊東町長各新聞記者及先輩諸氏生徒父兄保證人等多數なりき

知事告辭左の如し

告辭

長野縣立木曾山林學校卒業式に莅み其の盛典を祝すると共に一言卒業生諸子に告ぐる所あらんとす

我國の地形山嶽に富み絶對に耒呂を容るゝに適せざるの地極めて多く國土に對比して林野の面積頗る廣く到處るに鬱葱たる森林を有する世界稀れに見る所なりとす是れ家屋の建造に日用什器の製作に萬國に類なき我國民の木材消費を以てして空缺を感せず能く今日に至れる所以なり然るに輓近に於ける人口の增加と諸工業の勃興とは製造原料乃至生活資料として林產物を要求すること漸く多く需要增々大にして濫伐蹂りに行はれ消費愈々盛にして植樹營林之れに伴はざるの憾み無き能はず國家百年の將來を憂ふるもの誰か斯業の現狀に甘ずるを得んや林業振興の聲四方に囂しきもの亦宜なりと云ふべし此の時に當り諸子今本校の課程を終り將に出て實務に就かんとす思ふに斯業

の前途諸子の努力に俟たざるべからざるもの極めて多かるべし須らく責務の存する所を自覺し學べるものを實際に施し常に本校教養の趣旨を體して勤勉力行以て國家に奉仕するところあるを期すべきなり諸子夫れ旃を勉めよ

大正九年三月二十六日
長野縣知事　赤星典太

祝詞

茲に本日の佳辰をトし本校第十七回卒業證書授與の式典を擧行せらるゝに當り本官亦席末に列するを得たるは甚だ光榮とする所なり

抑も諸子が今日の榮譽を荷はれたる所以のものは全く教師諸先生の懇篤なる訓陶と諸子が日夜孜々として學業を勵み螢雪の功を積まれたる結果に外ならずと謂ふ可し豈賀せざるべけんや

惟ふに林野の經營は國家必須の事業にして之が消長は直に國民の生活上に至大の關係を有す社會は之が技能鍛錬の士を俟つや切なり庶幾くは修得の知識を活用し以て世に貢献せられんことを一言以て祝詞となす

大正九年三月二十六日
長野縣西筑摩郡長　園田竹熊

祝辭

送辭

蓬に卒業の盛式を祝す

大正九年三月二十六日　在長春　七宮純雄

山野に充つる新綠の句、東風に漂ふ菜芳の香、潑剌たる生氣は將に天地の間に磅礴たらんとするの新春、茲に本校は第十七回卒業證書授與の盛典を擧行せらる、兄等の光榮何物か之に如かんや

今日の榮譽を獲たるは固より、抑々兄等が校長先生並諸先生の懇切なる薫陶の賜なりと雖も亦夙夜勵精自ら能く螢雪の効を積みたるの成果たらんはあらず

顧つて我國林業の現狀を見るに近時頗る長足の進歩を遂げたるも、前途猶遼遠にして諸兄今後の活動に須つ所大なり。兄等宜しくこの重任を自覺し幸に自重自愛以て斯界の向上發展に貢献し我國の名聲をして益々發揚せられんことを望むや切なり

顧みたば生等は入學以來深厚なる情誼と懇切なる指導とを賜はりしも其の萬分の一にも報ゆることなくして東西山川を隔てんとす、惜別の情茲に至りて極る

然りと雖も今後益々發奮努力し、校風の發揚に努め敢て諸兄の後進たるに愧ぢさらむことを期す

冀くは諸兄よ、尚生等のため指導と鞭撻とを賜はらんことを、情切にして言ふ所を知らず、聊か蕪辭を述べて送辭となす

大正九年三月二十六日
在校生總代　村松一郎

答辭

凍雲纔かに晴れて將に陽春の佳季を迎へんとするに當り茲に本日をトし生等五十有一名の爲に卒業證書授與の盛典を擧行せられ知事閣下を始め來賓各位の御臨場を忝ふし且つ知事閣下並に校長先生來賓各位の懇切なる訓辭を賜はり又在校生諸君の深厚なる送辭を忝うす生等の榮譽何物か之に如かん

思ふに生等今日此の光榮あるは之れ偏に諸先生が三歳の長き春秋を一日の如く稚心去り難き生等の爲に懇篤なる教訓と周到なる指導との致すところにして師恩の高且深なる實に山海も霞ならざるなり然るに今又生等の前途に就き校長先生の懇切なる教戒を賜はり感激の至りに堪へず

生等今や羽翼纔に就りて多端なる現時の林業界に入らんとするに當り其の負荷の重且大なるを思へば身能く其の任に堪へ得ざらん事を懼ると雖も至誠一貫勉勵事に當り克く本校教養の趣旨を全うし今日の名譽をして益々光輝あらしめ以て多年の鴻恩に酬ゆる所あらんことを期す之れを以て答辭とす

大正九年三月二十六日
卒業生總代　遠山虎雄

○卒業生氏名次の如し（身長順）

長野縣西筑摩郡開田村　高橋　秀惣
　　〃　　福島町　勝野　忠三
岐阜縣可兒郡鷲津村　椙山　節男
　　〃　　吉城郡神川村　紺田　孝三
愛媛縣新居郡大町村　村上　道信
　　〃　　丹羽郡布袋　吉田　正男
長野縣西筑摩郡三岳村　向井　一男

長野縣西筑摩郡福島町　八木　憲藏
　　〃　　〃　　千田　瑞穗
　　〃　　〃　　駒ヶ根村　遠山　虎雄
岐阜縣可兒郡土田村　可兒　敏郎
　　〃　　惠那郡川上村　小縣　球次
　　〃　　益田郡川西町　水口　久
長野縣西筑摩郡福島町　小池　常三
　　〃　　〃　　王瀧村　中越　三郎
岐阜縣吉成郡上寶村　直井　利雄
山梨縣西山梨郡能泉村　長田　克巳
長野縣南安曇郡梓村　長崎　信一
岐阜縣惠那郡上村　安澤　清吉
長野縣西筑摩郡福島町　原　榮太
　　〃　　東筑摩郡片丘村　花村　隼則
　　〃　　南安曇郡有明村　大島　晃治
三重縣度會郡大内山村　米倉　巧
愛媛縣丹羽郡岩倉　木村　榮一
長野縣西筑摩郡王瀧村　瀧　美雄
　　〃　　福島町　早川　嘉一
山梨北巨摩郡上手村　小林　愛司
長野縣南安曇郡高家村　深澤　佐愛
　　〃　西筑摩郡福島町　三原　忠一
　　〃　上伊那郡春近村　岡田　萬秋
　　〃　上水内郡小川村　西村　清志
　　〃　更級郡共和村　山中三十四
三重縣多賀郡國澤村　野口　勇
靜岡縣駿東郡泉村　立道　乙松
長野縣南安曇郡有明村　鈴木　正雄
　　〃　下伊那郡波合　吉田　良惠
　　〃　　〃　　塚田繁次郎

　　〃　西筑摩郡福島町　鈴木　靜夫
岐阜縣惠那郡中津町　原　舍次郎
山梨縣南巨摩郡飯富村　橋爪　滋
愛媛縣新居郡神郷村　矢野　佑
岐阜縣惠那郡苗木町　霞上正次郎
　　〃　　坂下町　吉村　幸助
長野縣西筑摩郡大桑村　田中　一
福島縣北會津郡大戸村　星　重男
長野縣下伊那郡上久堅村　小池　正人
岐阜縣可兒郡廣見村　水野　宏
長野縣西筑摩郡福島町　小桂　二郎
　　〃　　〃　　原　英雄
　　〃　　更級郡稲星村　吉田　武男
　　〃　　卒業生優等者　高橋　秀惣　峯村　歳末
遠山　虎雄　千田　瑞穗
岡西　萬秋　在學中皆勤者
　　〃　　皆　勤　者
深澤　佐愛　長崎　信一
第二學年優等者
村松　一郎　井戸　利夫
中田　基一　藤井　鉚
　　〃　　皆勤者　森田孝太郎
木下　旭　片原　祐一　宮城　吉雄
　　〃　　精勤者
野口　鉚　第一學年優等者
藤井　石原　元
立道　乙松　平出　耕一
　　〃　　皆勤者
鈴木　正雄　近藤　清美
片田　敏郎
吉田　良惠
伊藤　良雄
　　〃

片桐　藤吉
　　〃　精勤者
山岸七之丞　小幡　榮一　鈴木　壽雄
平出　耕一　北原　篠賴

○送別會、謝恩會　卒業式終了後午後一時より校友會開催親愛の情を盡し離合の常なきを語り喜色滿面の中に閉會其の後卒業生は職員一同に茶菓を饗し歡語暫し謝恩の意衷を表せりかくて記念撮影をなし解散

○始業式　四月一日午前九時より講堂に於て擧行校長旅行中とて中村教頭代りて校規勉學に就いて訓諭せらる

○入學許可　四月七日入學者氏名發表あり長野縣五十四名、岐阜縣十四名、愛知縣三名、山梨縣四名、山形、靜岡、兵庫の諸縣各一名宛にて氏名次の如し

長野縣東筑摩郡山形村　上條　萬志
　　〃　　坂北村　柳澤　宗重
　　〃　　中山村　高田　早丙
　　〃　　壽　村　青木　茂幸
　　〃　　洗馬村　大槻　榮壽
　　〃　　笹賀村　波羅　友治
　　〃　　島立村　田中　稲實
　　〃　　坂井村　太田　幸保
　　〃　　山形村　大池　澄雄
長野縣上水内郡富士見村　金子　平雄
　　〃　　若槻村　宮下　賢藏
長野縣上伊那郡三義村　北原　辰男
　　〃　　伊那町　宮下　武夫
長野縣南佐久郡平賀村　阿部達三郎

仝 坂北村 植村弘
長野縣下伊那郡和田村 飯島和司雄
仝 平岡村 宮江修
仝 泰阜村 岩崎正章
長野縣小縣郡 大門村 兒玉良人
仝 西壇田村 禮澤龍登
長野縣下高井郡上木島村 小松雄二
仝 往郷村 湯本伊左衛門
仝 小林九十九
長野縣南安曇郡安曇村 奥原亮
仝 明盛村 丸山作義
長野縣西筑摩郡福島町 川上榮司
仝 原義治
仝 佐藤謙三
仝 關口立夫
仝 林廣一
仝 野本久吉
仝 長谷川糾
仝 池口元助
仝 小林廣助
仝 三輪正夫
仝 海老澤恒雄
仝 櫻井榮一
仝 水野忠助
仝 下條亮平
仝 水野福三
仝 宇佐美鑑一
仝 川尻吾碩
仝 芝原榮治
仝 山内七郎
仝 吾妻村

仝 讀書村 相吉甲子永
仝 大桑村 市川正
仝 吾妻村 多田駒藏
仝 讀書村 山形縣東山郡 大寺村
仝 開田村 福島縣石城郡 三坂村 大谷乾隆
仝 三岳村 兵庫縣美方郡 射添村 宅見三男
仝 讀書村
仝 新湯村
仝 日義村
仝 開田村
仝 中津町
仝 樋口靜雄
仝 谷多喜雄
仝 加藤浪男
仝 樋口國治
仝 河崎好正
仝 安田二郎
仝 松島正彦
仝 片原宏
仝 今井龍雄
仝 中谷力三
仝 辻井誠造
仝 佐藤鎮守
仝 原金一
仝 青山泉
仝 山内勝
仝 吉村龜一
仝 石川熙
仝 細口金市
仝 長谷川史郎
仝 福井保郎
仝 伊佐治彌兵衛
仝 阿部美千雄
仝 矢島義一
仝 上島菊造
仝 荻野重一
仝 鵜飼錠一
仝 河合幸一
仝 細窪友雄
仝 田中文正
仝 清水恒一
仝 日春村
仝 靜岡縣賀茂郡 仁科村
仝 山形縣東山郡 大寺村
福島縣石城郡 三坂村
兵庫縣美方郡 射添村

○級長任命 二三學年級及副級長左の如く任命ありたり（四月十日）

三學年 級長 村松一郎
副級長 宮城吉雄
二學年 級長 小松順市
副級長 伊藤良雄

一學年假級長任命次の如し（四月十五日）

一學年 甲組級長 市川正
仝 副級長 荻野重一
乙組級長 兒玉良人
仝 副級長 佐藤謙二

○級主任々命 缺員なりし二學年級主任及一學年級主任の任命あり

一學年甲組主任 菊池教諭
仝 乙組主任 塚越教諭
二學年主任 田中教諭

○西筑摩郡淮教員養成所 西筑摩郡經營の一ヶ年修業淮教員養成所は昨年通り今四月設置せられ五日入學式擧行七日より授業開始す

校友會便り

○役員任命 本年度校友會役員四月十日任命氏名次の如し

庶務 部長 村松一郎
副部長 井戸利夫

雜誌 部長 藤田喜一
副部長 小幡弘

辯論 部長 片桑英雄
副部長 中島省三

撃劍 部長 宮城吉雄
副部長 今野啓藏

庭球 部長 早川秀雄
副部長 荒木要

弓術 部長 長谷川要治郎
副部長 數野二郎

遠足 部長 中田基
副部長 池主鐵治

柔道 部長 柳澤虎三
副部長 大原山猛志

○顧問委囑 遠足部雜誌部は顧問を缺き居りしも左の如く委囑あり

遠足部顧問 菊池教諭
雜誌部顧問 田中教諭

會員異動

○安江悅次郎君 今回山形縣廳林務課より仝縣下西村山郡役所に轉任せられたり
○糸魚川良二君 朝鮮黃海道廳第一部勸業課に轉せらる
○篠原將英君 今回愛媛縣宇摩郡關川村大字上野住友五良津山事務所に轉任せらる
○宮澤功君 盛岡高等農林學校林學科に入學せられたり
○輪湖正由君 鐵道院奉職中の處今回官を辭し株式會社杉本醫療器械店に入社專務取締役に就任されたり
○服部啓治郎君 岐阜縣より新潟縣廳農林課に轉勤さる
○田中榮一君 今回官途を辭し秋田本材株式會社に入社されたり
○原正造君 下伊那郡會地村に轉住せらる
○松島長三君 大阪歩兵第三十七聯隊第三中隊に軍隊生活中
○市川豐二君 長野縣林務課に入られたり
○塚田大君 茨城縣太田町日立鑛山事務所に轉せらる
○箕部覺明君 三月農橋輜重兵第十五大隊三中隊輸卒舍第二班に入營せられたり
○小岩井茂樹君 秋田縣北秋田郡長木村大館小林區第一號上代野保護區官舍に轉任
○小澤安親君 臺灣嘉義營林局出張所製材工場に勤務さる
○井原邦雄君 上田蠶絲專門學校製絲科へ入學
○原川只一君 福井縣大野郡下穴馬村大字朝日藤田山林部事務所に轉任
細窪友一郎君 北海道帝室林野管理局札幌支局に轉任
○秋田常次郎君 鹿兒島高等農林學校に入學せられたり
○奥村利一君 福島町に轉任せらる
○松上三郎君 東京駒場農科大學林學實科に入學せられたり
○東原智君 南佐久郡役所へ轉任
○安藤次郎君 北安曇郡役所へ轉任
○小池類吾君 帝室林野管理局福島出張所へ轉任
○山本茂君 盛岡高等農林學校に入學
○小崎次郎君 高松小林區署に轉任せらる
○高木本技師 大野川小學校勤務中昨年十二月結腸にて死去なされし由誠に哀悼の至に堪へず
○松岡治三郎氏 縣會議員として山林學校に功勞多々なりしも本年二月流行性感冒にて死去せらる愁傷の至なり

第十七回卒業就任職

○八木愿藏君 東京麴町區丸内古河合名會社に就職
○千田瑞穗君 大阪市西區南境川町なる大林組製材部へ就職
○長田克己君 東京大林區署に就任
○長崎信一君 松本小林區署に就任
○早川嘉一君 星重男君原英雄君は上松帝林出張所黑澤伐木所に就職
○岡西萬秋君 京都小林區署に就任
○霞上正次郎君 東京下目黑林業試驗所に就任
○小池政人君 北佐久郡芦田村蠶農學校に就任

七宮先生謝恩金領收報告

金貳圓 古畑今朝茂君
金貳圓 大坪時治君
金壹圓 久保田吾良君
金壹圓 吉田佐十郎君
金參圓 川口勇次郎君

林友代領收報告

金五圓　福澤定雄君
金五圓　野本美嘉君

金貳圓　長田克己君
金貳圓　小池常三君
金貳圓　水野宏君
金貳圓　小縣球次君
金貳圓　田中一君
金貳圓　安藤清吉君
金貳圓　橋爪滋君
金貳圓　吉田正男君
金貳圓　可兒敏郎君
金貳圓　水口久君
金貳圓　吉村幸助君
金貳圓　吉田良惠君
金貳圓　三原忠一君
金貳圓　大島晃治君
金貳圓　山中三十四君
金貳圓　野口勇君
金貳圓　星重男君
金貳圓　深澤佐愛君
金貳圓　花村隼則君
金貳圓　畠井利雄君
金壹圓五拾錢　長崎信一君
金壹圓五拾錢　米倉巧君
金壹圓五拾錢　宜道乙松君
金壹圓五拾錢　木村榮一君
金壹圓五拾錢　村上遵信君
金壹圓五拾錢　塚田繁治郎君

金壹圓五拾錢　鈴木正雄君
金壹圓五拾錢　八木愚藏君
金貳圓　小池政人君

大正九年四月廿五日印刷
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地　岐蘇林友社　主筆　矢澤
長野縣松本市小柳町八十五番地　印刷人　淺川吉藏
【定價金錢錢】